

言語によるカテゴリー化の通時的変遷

— ギリシャ語の意味基準「上方の接触・非接触」を素材に —

橘 孝司

1. はじめに

本稿の中心課題となるのは、言語によるカテゴリー化とその通時的発展との関係である。ある歴史的段階で観察される言語カテゴリー化が、他の段階でも見られるという保証は勿論ない。例えば、古代ギリシャ語で関与的であった「ある場所への移動」と「ある場所の存在」という空間定位に関する区別は、通時的変遷の中で失われていった。現代ギリシャ語（標準語）では、両者は同じ前置詞 $\sigma\epsilon$ で表現され、同一カテゴリーに含まれるに至る。それならば、古代語に見られ、現代語にも保持されているカテゴリーはどうだろうか。そのようなカテゴリー化をおこなう意味特徴は非常に堅固で基本的な概念であり、古代語と現代語とをつなぐ中世語でもやはり関与的でありつづける、と考えるとよいのだろうか。二つの段階のカテゴリーが同じ形態で表現される場合は、そう考えられるかも知れない。例えば、古代ギリシャ語で「ある場所からの分離」を意味した前置詞 $\acute{\alpha}\mu\acute{o}$ は現代語でも用いられている。現代語の $\acute{\alpha}\mu\acute{o}$ は、消失した古代語の他の前置詞の用法も吸収しているから、古代語 $\acute{\alpha}\mu\acute{o}$ と等価であるとは言えない。しかし、「分離」と言う意味特徴自体は、古代から現代まで同一の形態で表されているから、ギリシャ語史全体を通じて堅固で基本的な意味概念であり続けた、と考えるとよいかもしれない。

以下で論じるのは、これとは異なる場合、すなわち、古代語でも現代語でも関与的ではあるが、それぞれの時代に別の形態で表現されるような意味特徴である。そのような意味特徴は、ギリシャ語史全体を通じて常に重要であり、古代と現代をつなぐ中世語の段階でも関与的であるのだろうか。これを検証する一例として「上方の接触・非接触」という空間概念に関する意味特徴を取り上げることとする。「接触」は一般言語学的にも、カテゴリー化の重要な要因として挙げられることが多い¹⁾。しかし、ギリシャ語史全般においても常にそうだ

ったのだろうか。

議論は以下の順に進めていく。まず第2-3節で、この意味特徴が、古代ギリシャ語、現代ギリシャ語のいずれの段階でも関与的であり、カテゴリー化の要因であること、ただし、それらの実現形態は二つの史的段階で異なっていることの二点を確認する。第4節では中世民衆ギリシャ語のテキストを素材として、現代語でならば「接触」「非接触」としてカテゴリー化される各々の状況が中世語ではいかに表現されているのか、異なるカテゴリー化を受けるのか否かを論じる。最後にその結果から推論されることを第5節で結論としてまとめる。

2. 古代ギリシャ語の「上方接触・非接触」の表現

古代ギリシャ語の「上方」表現に関しては、代表的な文法書でも触れられているが、特に構造的な視点から分析を試みた研究として Benedetti (1983) を挙げることが出来る。そこでの議論の中心は「下方」表現を担う前置詞 *ὑπό* であるが、空間表現という体系内での価値を確定するために、これと対立する「上方」表現の前置詞も論じられている。それによると、「下方」が「接触」に関しては非関与的であるのに対し、「上方」はこの意味規準の有無によって、二つの前置詞を使い分ける (Benedetti, 1983:45-46)。

- (1) ζῶεσκον ἐπὶ χθονὶ φύλ' ἀνθρώπων Hes. *Op.* 90²⁾
「大地の上に人間の種族が住んでいた」
- (2) ταίνας ἔχοντα ἐπὶ τῆς κεφαλῆς πάνυ πολλὰς, Pl. *Smp.* 212e
「頭の上にリボンをたくさんつけて」
- (3) κρέμασεν φόρμιγγα λίγειαν / αὐτοῦ ὑπὲρ κεφαλῆς Hom. *Od.* 8, 67-8
「朗々と響く豎琴を彼の頭の上に吊した」
- (4) ὑπὲρ θαλάσσης καὶ χθονὸς ποτωμένους A. *Ag.* 576
「海と陸の上を飛んでいき」

定位される対象（「人間の種族」「リボン」）が基準点（「大地」「頭」）の「上方」に接していると思なされれば、前置詞 *ἐπὶ* が使用される(1-2)。両者が「接触」を欠き、何らかの間隔があると認められれば（「豎琴」と「頭」、「飛ぶ主体」と「海・陸」）、前置詞 *ὑπὲρ* が選ばれる(3-4)。また、同一の文中に両前置詞が対比的に使われる例として(5)が挙げられている (p. 46, note 43)。

- (5) Παγὲν τε οὕτως τὸ μὲν ὑπὲρ γῆς μάλιστα παθὼν ταῦτα χάλαζα, τὸ δ' ἐπὶ γῆς κρύσταλλος, τὸ δὲ ἦπτον ἡμιπαγὲς τε ὄν ἔτι, τὸ μὲν ὑπὲρ γῆς αὐτὸ χιών, τὸ δ' ἐπὶ γῆς συμπαγὲν ἐκ δρόσου γενόμενον πάχνη λέγεται. Pl. *Ti.* 59e

「このように非常に大きな作用を受け、大地の上方で凝結するものは『霰』、大地の上でなら『氷』、それほど作用を受けず、大地の上方でいまだ半凝結したままのものは『雪』、大地の上で露から凝結して生じるものは『霜』と呼ばれる。」

「上方接触・非接触」のカテゴリー化を表示すれば以下ようになる³⁾。

	接触	非接触
上方	ἐπί	ὑπέρ

しかしながら、Benedetti 自身も認めるように、これは対立関係を非常に図式的にとらえたものであり、実際にはこれを逸脱する例も見られる (p. 46, note 44)。例えば「彼方に、向こうに」と関連する移動の動詞は ὑπέρ と結びつきやすい。また、ἐπί は厳密な「上方の接触」以外に「近接」も意味する。さらに、水平面での移動では差異が中和されることがある⁴⁾。したがって「接触の有無」が二つの前置詞を分ける厳密な必要十分条件である、とは言い難い。

しかし、特に前置詞のような機能語に認められる、このような意味の広がり、類義語との意味範囲の重なりは、多くの言語に見られる現象である。これをうまく説明する方法の一つは、機能語にプロトタイプとなるひとつ (ないし複数) の意味を確定し、他の意味はその拡張としてとらえるやり方であろう⁵⁾。本稿の基本的立場はこれに賛同するものであるが、その関心事は、そのようなプロトタイプの意味の一つである「上方の接触・非接触」という意味規準が、或る言語の歴史全体を通じて、表現される形態に関わらず、関与的であり続けたのか、という点にある。

古代ギリシャ語のより後の段階では、上記の前置詞と並んで副詞起源 (すなわち元来、自由形態素) の語が単独ないし名詞と共に共起して用いられるようになる⁶⁾。しかし、Benedetti によれば、ここでも「上方接触・非接触」は異なる形態により表現し分けられ、同一のカテゴリー化が保持されている⁷⁾。Benedetti には引用例がないので、筆者の例をカテゴリー化の図式とともに掲げておく。

- (6) οἰεσθαι ἐπάνω αὐτῆς [= γῆς] οἰκεῖν Pl. *Phd.* 109d
「その (大地の) 上に住んでいると考える」
- (7) οὐ δύναται πόλις κρυβῆναι ἐπάνω ὄρους κειμένη NT. *Ev. Matt.* 5.14
「山の上にある都市が隠されることはない」
- (8) ὁ ἀναβὰς ὑπεράνω πάντων τῶν οὐρανῶν NT. *Ep. Eph.* 4.10
「全ての天の遥か上に上った御方」

「水の上に住まいを有していた」

	接触	非接触
上方	ἐπάνω	ὑπεράνω

3. 現代ギリシャ語の「上方接触・非接触」表現

次に、現代ギリシャ語における「上方接触・非接触」表現を概観しておこう。ここでも、古代語同様「上方接触」の有無は関与的な意味特徴である。しかし、この意味特徴は、古代語のように単一の前置詞ではなく、空間副詞と前置詞の結合したいわゆる複合前置詞によって実現される。

(10) Υπάρχει ένα βιβλίο πάνω στο τραπέζι.

「テーブルの上に本が一冊ある」

(11) Ένα αεροπλάνο πετάει πάνω από την πόλη.

「飛行機が都市の上を飛ぶ／飛んでいる」

(10)では定位対象「本」と基準点「テーブル」との間に「接触」が存在し、複合前置詞 πάνω σε (または異形態σ) が用いられる。(11)では、定位対象「飛行機」と基準点「都市」の間にはそのような「接触」は存在せず、別の複合前置詞 πάνω από が使われている。注目すべきは、空間詞 πάνω の部分は同じであるが、前置詞が σε, από と異なっており、前置詞の部分で意味条件「接触の有無」が表現し分けられる点である。この対立を表示すれば以下になるだろう。

	接触	非接触
上方	πάνω σε	πάνω από

4. 中世民衆ギリシャ語の「上方接触・非接触」表現

さて、古代語でも現代語でも見られた空間概念に関するカテゴリー化は中世民衆ギリシャ語でも同様になされていたのだろうか。この時期の資料中で「上方接触」の状況を示す例を見つけるのは困難ではない⁸⁾。

(12) άνω στον πύργον ίσταται φισκίνα ωραιωμένη Φλώρ. 1352

「塔の上に美しいプールがあった」

(13) Μικρόν παιδίον εφάνηκεν απάνου εις άγριον όρος. Αρμούρ. (Αλεξ. Στ.) 138

「幼い少年が野の山の上に現れた」

(14) επάνω εκαθέζετον εις του νησιού την πέτραν. Ιμπ. 552

「島の岩の上に腰を下ろしていた」

(15) απάνω δε εις την κορυφήν του θαυμαστού του πύργου

είχεν παράξενα γλυπτά θαμάσματα μεγάλα. Βυζ. Ιλιάδ. 107-8

「その驚くべき塔の頂上に

巨大で不思議な彫像があった」

いずれの例も「上方」空間副詞+前置詞 εις ((12)はその新しい形態 σε の異形態)を含んでいる。これらは後に現代語 πάνω σε に繋がっていく形式である。

これに対し、明確に「上方非接触」の文脈を指す例は、残念ながらほとんど現れない。以下では、その少数例の中から、現代語では「上方非接触」と把握されて πάνω από により表現され得るような三つの状況を取り上げ、中世ギリシャ語ではいかに表現されているのかを検討する。

4.1. 「上を飛ぶ」

まず、例(11)が示す通り、「定位対象が基準点の上方を飛ぶ」という状況は、現代語では、πάνω από + 基準点により示される。中世語では、14世紀頃の「ビザンツ版イリアス」に次のような例が見られる。

(16) πέντε πουλιά επέτουντα απάνω εις τον θρόνον Βυζ. Ιλιάδ. 56

「五羽の鳥が玉座の上を飛んでいた」

ここでの動詞は επέτουντα「飛んでいた」であるが、基準点「玉座」は απάνω από ではなく、απάνω εις に支配されている。次の(17-19)は15世紀頃成立の「アレクサンドロス物語」からの例である⁹⁾。

(17) απανωθέον την φλόγαν επέτοντο Διήγ. Αλ. F. 46.4

「(有翼女族は)炎の上を飛び回った」

(18) επέταν [MS: επέπονταν] απανωθέον το φουσατόν Διήγ. Αλ. F. 46.34

「(有翼女族は)軍隊の上を飛び回った」

(19) επέτονταν άνωθεν του φουσατόν Διήγ. Αλ.V. 54.6

「(有翼女族は)軍隊の上を飛び回った」

(16)と同じ動詞 επέτοντο, επέταν, επέπονταν「飛んでいた」が現れているが、共起しているのは απανωθέον「上」+対格名詞 φλόγαν「炎」、φουσατόν「軍隊」及び άνωθεν + 属格名詞 φουσατόν「軍隊」であり、ここでも前置詞 από は現れていない¹⁰⁾。

さらに、(20)は16世紀散文の例であるが、ここでも(17-18)と同じく空間詞+

(前置詞なしの) 対格名詞が使用されている。

(20) απετάγει **απανωθίο** την φωλίαν του Καρτάν., Π. Ν. Διαθ. φ. 56ν

「(ペリカンは) 自分の巣の上を飛ぶ」

このように、現代語では πάνω από を支配する動詞 πετώ, πέτομαι「飛ぶ」は中世語では απάνω εις ないし απανωθεόν / απανωθίο + 対格名詞、ないし άνωθεν + 属格名詞と共起している。

4.2. 「川の上に橋を架ける」

二つ目の状況として、「川の上に橋を架ける」という行為を考えてみよう。現代語は、この状況において「橋」と「川」の間に「接触」を見て取らず、πάνω από で表現することがある¹¹⁾。

(21) Κτίζω μια γέφυρα **πάνω από** το ποτάμι.

「川の上に橋をかける」

これと同じ状況を表現する中世語の例として(22)が観察された。

(22) Εποίησεν γέφυραν **τερπνήν απάνω εις** τον Ευφράτην.

「エウフラテス川の上に見事な橋を架けた」 Διγ. (Αλεξ. Στ.) Esc. 1660

ここでは空間副詞 απάνω が από ではなく、εις と共起している。また、15世紀の散文に見られる例として(23)がある。

(23) Εποίησαν γέφυραν **επάνω** αυτόν (= τον ποταμόν) Εκθ. χρον. 73

「彼らはその (= 川) 上に橋を架けた」

ここでも、(22)と類似した状況が描かれ、同じ動詞 εποίησαν「作った」・目的語 γέφυραν「橋」が現れているが、空間副詞 επάνω には対格代名詞 αυτόν (= 川) が後続している¹²⁾。

(22-23)に見るように、「川に橋を架ける」という状況を描写する場合にも、基準点は、前置詞 εις + 名詞句または前置詞なしの代名詞で表現され、前置詞 από は現れていない¹³⁾。

4.3. 「上に衣服を着用する」

三つ目の状況は、「ある衣服の上に別の衣服を着用する」という場合である。現代語では「ある衣服」と定位対象「別の衣服」との間に「接触」があるとはみなさず、πάνω από で表現される。

(24) Φορώ πουλόβερ **πάνω από** το πουκάμισο.

「セーターをシャツの上に着る」

類似の状況の表現を中世民衆語の資料で探すと、次のような例が見出される。

(25) **απάνω εις** το τζιμπούνιον ... φορεί ρασιτικόν κάμπαν ... Βυζ. Ιλιάδ. 604-7

「(パリスは) 上着の上に僧衣風のマントを着ている」

(26) βιατάρην έβαλα τερπνόν, καθάριον μαγδαίτην,

πράσινον αραβίτικον **απάνω εις** το λουρίκιν' Διγ. (Αλεξ. Στ.) Esc. 1462-3

「私は胸当ての上にアラビア製の緑の服を着た、

バグダッドの清潔で素晴らしい服を」

(27) Άρματα εφόριεν το φαρίν αργυροπεταλάτα

και **απάνω εις** τα λαμπρά άρματα, τα θαυμαστά εκείνα

κουβέρτα χρυσοτσάπωτη με το μαργαριτάρην

εθέκασιν εις το φαρίν ξένη τετιμημένη. Ιμπ. 383-6

「馬は銀板の武具をまとっていた

その輝く、驚くべき武具の上に

金と真珠で縁取られた覆いを

珍しくも高価な品を、その馬に置いた」

(28) **απανωθεόν** την φορεσίαν εβάστα **απανωφόριν** φοινικιόπουλον

「衣服の上にフェニキアの外套をまとっていた」 Διήγ. Αλ. F. 60.1

(29) όλοι είχαν φτερά ... και **απανώθειον** τα σκιάδιά τους στεφάνια

「全員が羽をつけ ... 帽子の上に花冠をかぶっていた」 Διήγ. Αλ. F. 125.3

(30) **απανωκλίβανον**, οπού βάνουν **απανωθεόν** τα άρματα Διήγ. Αλ. F.49.13

「具足の上に着る陣羽織」¹⁴⁾

(25-27)には **απάνω εις** が、(28-30)には **απανωθεόν** (ないし **απανώθειον**) + 対格名詞が使用され、前置詞 **από** は見られない。但し、(25)の動詞は (24) と同じ **φορεί** 「着ている」、(28)は **εβάστα** 「着ていた」、(29)は **είχαν** 「持っていた」とそれぞれ状態動詞であるのに対し、(26) (30)の動詞は **έβαλα** 「着た」と **βάνουν** 「着る」、(27)の **απάνω εις** を支配するのも 383 行の **εφόριεν** 「着ていた」ではなく、おそらく 386 行の **εθέκασιν** 「着せた」、というように動態動詞であり、定位対象「服」の移動がより強く含意されるために、移動の「着点」表現として **εις** が選択されているのかも知れない。

4.4. 「接触の有無」とカテゴリー化

4.1-4.3 で見たように、現代語では「非接触」と把握され、**πάνω από** が用いられ得る三つの状況において、中世語では、様々な「上方」副詞に **εις** で導入され

る前置詞句、対格形、属格形が結合したものが用いられている。すなわち、

απάνω εις + 対格形

απανωθεόν / απανώθειον + 対格形

απανωθίο + 対格形

επάνω + 対格形

άνωθεν + 属格形

これらの形態を「上方接触」の場合と較べてみよう。まず、απάνω εις は「上方接触」の文脈でも見出される（例 (15) も参照）。

(31) και βλέπω την και εκάθητον **απάνω εις** το κλινάριον

「そして彼女が寝床の上に座っているのを見る」 Διγ. (Αλεξ. Στ.) Esc. 1184

(32) εάν δεν ήθελεν είσταιν το νερόν **απάνω εις** την γην

「もし水が地の上に存在しないならば」 Καρτάν., Π. Ν. Διαθ. φ. 43r

άνωθεν + 属格形で「上方接触」を指す例として、

(33) το δε κατούδιν βλέψαντες **άνωθεν** της τραπέζης, Προδ. III 267

「食卓の上の猫を見て」

(34) άλλος εις χέριον ίστατο **άνωθεν** των Ερώτων, Βελθ. 344

「他のものはエロスたちの手の上に立っていた」

απανωθεόν / απανώθειον + 対格形の例は 幾つか見られるが、明瞭に「上方接触」を意味するとは言い難い¹⁵⁾。απανωθίο / επάνω + 対格形については、用例数が少ないこともあって「上方接触」の例は見出されなかった¹⁶⁾。

そこで、απάνω εις と άνωθεν + 属格形に限って言えば、中世語では「上方接触」と「上方非接触」という空間定位上の意味規準は同じ形態によって表現され得たということになり、二つの概念は同一のカテゴリ－化を受けていたことを示唆しているように思われる。

なお、現代語の「上方非接触」表現 πάνω από に対応する απάνω από (ないし εκ) といった形が、中世語テキストに現れないわけではない。しかしながら、筆者の調査した範囲では、「上方」副詞＋分離の前置詞 από / εκ という形式は、中世語では「上方からの分離」表現として機能している。つまり、前置詞 από, εκ がまだその原義「分離」を明確に保っている。

(35) Ο Αχιλλές επήδησεν **απάνου απέ** το κάστρον. Αχιλλ.Ο (Smith) 534

「アキレスは城の上から飛び降りた」

(36) Κι από το φόβον έπεσεν **απάνω 'κ** το κλινάριον Χούμνου, Κοσμογ. 699

「そして恐れあまり寝床の上から落ちた」

ここでの前置詞は、現代語の複合前置詞ほどには、空間副詞と密接に繋がっていない。その点は「上方」の代わりに「下方」の空間詞が用いられても、同じ空間移動が表現されることからもうかがえる。例えば、

(37) και σύσσελον τον έριφα από την φάραν κάτω. Διγ. (Αλεξ. Στ.) Esc. 1448
「そして私は彼を馬から下へ鞍ごと投げ落とした」

ここから現代語の段階に至るには、前置詞 από が空間副詞と共に共起した際に「分離」の意味を弱めるようになる必要がある。それが取りもなおさず、現代語の複合前置詞の成立に繋がる¹⁵⁾。したがって、中世民衆語の段階では、現代語風の「上方非接触」の表現が十分な成立をみとらず、「上方接触」表現と同じ言語カテゴリーを形成していた、と思われる。

5. 結論

冒頭の第1節で掲げた問題提起に即し、本稿で考察されたことをまとめれば、次のようになる。古代語でも現代語でも「上方の接触・非接触」は関与的な特徴であり、カテゴリー化の要因である。しかしながら、それを実現する形態は、古代語 επί と ύπέρ、後の段階で έπάνω と ύπεράνω、現代語 πάνω σε と πάνω από という風に各時代で異なっている。したがって、古い段階から新しい段階へと移り変わる際に過渡期を経ることになるが、その際の形態の交替に伴って、以前は強固であった意味特徴が関与的ではなくなる、ということが生じ得る。かくして「上方接触の有無」はビザンツ後期において、前置詞ないし副詞のカテゴリー化には関わらないところまで後退してしまったものと思われる。但し、その意味特徴がそのまま忘却されてしまうほど認知上些細な条件ではなかったことは、その後の段階で複合前置詞という新しい形により再導入された事実が示している。

註

1) 例えば、Taylor (1988:304) は前置詞の空間用法を対照研究する際に配慮すべき関与特徴の一覧を掲げるが、そのうちに contact を含める。また、Comrie & Smith (1977:31-32) のフィールドワーク用の質問表も、記述すべき空間概念として superior, inferior と並んで superior-contact, inferior-contact のように「接触の有無」を問題にする。さらに、Talmy (1983:241-243)。

2) 古代ギリシャ語作品の引用形式は H.G. Liddell, R. Scott & H.S. Jones (1986⁹) A

Greek - English Lexicon 中の Authors and works (pp.xvi-xxxviii) に従う。

3) Benedetti, p. 46. ただし、「接触」に非関与的な「下方」前置詞 *ὑπό* も挙げられ、議論の中心は、全体が三項対立を成す点にある。

	接触	非接触
下方	<i>ὑπό</i>	
上方	<i>ἐπί</i>	<i>ὑπέρ</i>

4) *ἐπὶ πόντον ἀλώμενος* Hom. *Od.* 7, 239 「海の上を漂いながら」と *ἀλάλησθε οἶά τε ληιστῆρες ὑπὲρ ἅλα* Hom. *Od.* 3, 72; 254 「あなた方は海賊のごとく海の上をさまよっているのか」。

5) レイコフ(1993:512-572) は多義で知られる英語の *over* の様々な意味を、*above-across* 「上方を横切る」を中心意義として、そこから拡張によって結ばれているネットワークとしてとらえようとする。

6) この交替の原因として、単一の前置詞の用法が広範囲になりすぎたため、空間用法専用の形態が必要になったことが挙げられている (Benedetti, 1983:48-49, Mayser, 1934:538)。

7) *ἐπάνω* と *ὑπεράνω* の対立が本当に「接触・非接触」なのか否かは、*ἐπί* と *ὑπέρ* の場合以上に明確でない点がある。そもそも *ὑπεράνω* の用例が限られている (Mayser, 1934:541)。また *ἐπάνω* の方は "*oberhalb von*" と "*ἐπί = auf*" の二義がある、とされている (Ib., 539-40)。すなわち *ἐπάνω* が *ὑπεράνω* の意味領域にかなり進入している。

8) 中世語テキストの引用形式は Κριαράς (1969-) による。特に Τομ. IB'σσ. μβ'-νβ'。

9) ほぼ同時期に書かれた「アレクサンドロス物語」E版では、(17) (18) は以下のようになる。

(17a) *απανωθεόν την φλόγαν επέτονταν* Διήγ. Αλ. Ε. 46.4

(18a) *έπιπτεν απανωθεόν το φουσατόν* Διήγ. Αλ. Ε. 46.3

すなわち、(17a)では、動詞の語尾がより新しい形態である点を除き、F版と同じである。(18a)は別の動詞 *έπιπτεν* 「落ちてきた、攻撃してきた」が対応しており、「非接触」の例にはなり難い。

さらに、F, E版とほぼ同時期のV版では *απανωθεόν* + 対格名詞 (17b) と *άνωθεν* + 属格名詞 (18b) が使われている。

(17b) *απανωθεόν την φλόγα απέτονταν* Διήγ. Αλ.V. 54.9-10

(18b) *επέτονταν άνωθεν του φουσατόν (= 19)* Διήγ. Αλ.V. 54.6

後代 (1750 年刊) の「アレクサンドロス物語現代語散文版」Η Φυλλάδα του

Μεγαλέξανδρου では、いずれにも *άνωθεν* + 属格名詞が使用されている。

(17c) *επετούσαν άνωθεν της φωτίας* Φυλλάδα. 771b. (Βελουδής, 1977)

(18c) *επετούσαν άνωθεν του φουσατού* Ibid.

また、動詞は「飛ぶ」ではないが、類似の状況を指しているのではないかと考えられる例として、

ήλθε αετός μέγας απανωθεόν την τένταν του βασιλέως και απόλυκεν αυγόν

「鷲が王の天幕の上に飛び来たって卵を落とした」Διήγ. Αλ. F.12.3

10) 同作品中に類出するこの空間副詞 + 対格名詞の統語形式については Tachibana (1994) 参照。

11) 「川に橋を架ける」という行為において「川」と「橋」の間に「接触」があるか否かという問題は、言語使用者の主観としては「橋」や「川」のどの部分に着目するか、ということによるであろうし、より客観的な問題としては、その時代の「橋」の構造やその季節の「川」の水量といったことと関連しているだろう。しかし、最終的には、各言語がこの言語外状況を慣習的にどのように表現しているのか、という問題に帰着すると思われる。幾つかの言語においては、「橋」は「川」には「接触」していない、とする言語カテゴリー化をおこなっている(英語 *to build a bridge over a river*, 独語 *eine Brücke über den Fluß bauen (schlagen)*)。他の言語では「橋」が一方の岸から他方の岸へと伸びている点に知覚の焦点を当て、「通過の経路」としてカテゴリー化をおこなう(英語 *to build a bridge across a river*, 露語 *построить (навести, перебросить) мост через реку*)。さらに、「接触の有無」という点では中立的であり、「橋」は「川」のただ「上方」に位置するととらえる言語もある(伊語 *gettare (costruire) un ponte su ql.co*, 仏語 *jeter (construire) un pont sur le fleuve*, 葡語 *construir uma ponte sobre o rio*)。

現代ギリシャ語の場合は、*πάνω σε* と *πάνω από* のいずれも使われ得る。すなわち、非常に接近したところに視点を置いて状況を微視的に眺める場合、そこに「接触」が欠けているとみなし、*πάνω από* が使われる。他方、視点を状況から離れたところに固定して巨視的に眺めるならば、「接触」が存在するものとして把握され、したがって *πάνω σε* が選ばれることになる。

12) 「モレア年代記」には攻城用に船の上に造られた橋に関する次のような例がある。「川」と「橋」の関係ではないので、「非接触」の例となるかどうか確かではないが、前置詞 *εις* を含んでいる。

γεοφύρια εποίησασιν απάνω εις τα καράβια Χρον. Μορ. Η. 542

(MS. *εποίησασιν επί το αυτό απάνω εις τα καράβια*, Cod. P. *άνω εις*)

「彼らは船の上に橋を造った」

13) これは複合前置詞が共起する場合の話である。単純前置詞のみで表現することも可能であり、その際は *εις* が現れる。

το γιοφύριν το ξυλένον, το 'ποίκειν ο γαρδενάλλης *εις* την θάλασσαν·

「枢機卿が海に造った木の橋」 *Μαχ.* 6781-2

Γέφυραν *εις* Γαρηλιανόν *ας* κάμωμε με πάλους *Κορων., Μπούας* 60

「ガリリヤノス川に杭を使って橋を架けよう」

14) 類似例として *Διήγ. Αλ. F.57.6* έβανεν από κλίβανον σημάδιον των Μακεδόνων *απανωθεν* τα άρματα. 但し構文がやや不明瞭。「武具の上にマケドニア人の紋章の陣羽織を着た(?)」

15) 例えば έβαλεν το *εις* την κάμαραν της *απανώθειον* την κλίνην της. *Διήγ. Αλ. F.108.1* 「それ (= アレクサンドロスの肖像画) を彼女の寝室の寝台の上に飾った」は位置関係が不明瞭。

16) *Du Cange* (1688:95) は *απανώθιον* 自体の意味を *απάνω* と同じと見るが、その引用例では古代語の *ὑπέρ* と同じ、すなわち「上方非接触」と解する (*ὑπέρ τὸν αέρα, ἀπανώθιον τοῦ αέρος ... ὑπέρ τὰ νέφη, ἀπανώθιον τῶν νεφῶν*) 。

επάνω + 対格形の用例は少ないが、*επάνω εις* は例(14)や次例が示すように「上方接触」を意味する。

Έστραπτεν *ως* ο ήλιος *επάνω εις* το φαρίν του. *Αχιλλ.Ο.(Smith)* 243

「彼は馬の上で太陽のように輝いていた」

17) 現代語の複合前置詞の成立には *από* の基本義「分離」が弱まって、「移動」の概念を含まない動詞とも共起できることが前提となる。そのような意味構造を持つ「上方」例で、筆者が観察し得た限りの古いものは、16世紀のヨアンニキオス・カルタノスであった。

ουρανός είναι ο *αέρας* οπού είναι *απάνω από* το κεφάλι μας

「天は我々の頭の上にある空気である」 *Καρτάν. Π. Ν. Διαθ. φ.* 43v

分離の前置詞 *από* と「移動」を含まない動詞の共起可能性は、他の複合前置詞 (*κάτω από* 「～の下」、*πίσω από* 「～の後ろ」、*γύρω από* 「～の周囲」) の成立についても、同様に前提条件となる。

引用文献

- Βελουδής Γ. (1977). *Η Φυλλάδα του Μεγαλέξανδρου, Διήγησις Αλεξάνδρου του Μακεδόνοσ*. Αθήνα.
- Benedetti, M. (1983). Sul valore locale della preposizione greca υπό. *Studi e Saggi Linguistici* 23, 23-75.
- Du Cange, Ch. (1688: rpt. 1958) *Glossarium ad scriptores mediae et infimae Graecitatis*. Lyon.
- Comrie, B. & Smith, N. (1977). Lingua Descriptive Studies: Questionnaire. *Lingua* 42, 1-72.
- Κριαράς, Ε. (ed.) (1968-). *Λεξικό της μεσαιωνικής ελληνικής δημόδοσ γραμματείας (1100-1669)*. Θεσσαλονίκη.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 【池上嘉彦・河上誓作・他（訳）『認知意味論』1993, 紀伊國屋書店.】
- Mayser, E. (1934 / rpt. 1970). *Grammatik der griechischen Papyri aus der Ptolemäerzeit, mit Einschluss der gleichzeitigen Ostraka und der in Ägypten verfassten Inschriften*. Vol. II-2, Satzlehre. Berlin / Leipzig : Walter de Gruyter.
- Tachibana, T. (1994). Syntactic Structure of Spatial Expressions in the Late-Byzantine Prose Alexander Romance. 『プロピレア』6, 35-51.
- Talmy, L. (1983). How language structures space. In H.L.Pick and L.P. Acredolo (eds.). *Spatial Orientation: Theory, Research and Application*. New York: Plenum Press, 225-82.
- Taylor, J. R. (1988). Contrasting Prepositional Categories : English and Italian. In B. Rudzka-Ostyn (ed.). *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam : John Benjamins, 299-326.

The Diachronic Change of the Linguistic Categorization:

Based on an Analysis of the Semantic Criterion \pm [SUPERIOR CONTACT] in Greek

Takashi TACHIBANA

In Ancient Greek (AG) and Standard Modern Greek (SMG), the semantic criterion \pm [SUPERIOR CONTACT] is relevant to the linguistic categorization in that both periods have distinct forms to materialize it (i.e. the prepositions $\acute{\epsilon}\pi\acute{\iota}$ vs. $\acute{\upsilon}\pi\acute{\epsilon}\rho$ in AG and the complex prepositions $\pi\acute{\alpha}\nu\omega$ $\sigma\epsilon$ vs. $\pi\acute{\alpha}\nu\omega$ $\alpha\pi\acute{o}$ in SMG respectively). Naturally, this can not imply that every diachronic stage of Greek was sensitive to this criterion. For instance, it is not certain whether Medieval Greek was equipped with the same categorization based on the criterion as in AG and SMG. In order to ascertain it, we analyze in this paper the texts in Medieval Vernacular Greek dated back to the 12th - 16th centuries.

Careful examination of numerous representative texts in this period reveals that examples abound which realize the semantic feature $+$ [SUPERIOR CONTACT]. The syntactic pattern which represents this feature is basically the same as that of Modern Greek (i.e. spatial adverb + the preposition $\epsilon\iota\varsigma$, or its new form $\sigma\epsilon$). On the other hand, it is rather rare to find the cases which depict the situation of $-$ [SUPERIOR CONTACT]. A small number of examples, however, can be observed which include semantic contexts that would be categorized as $-$ [SUPERIOR CONTACT] – expressed by $\pi\acute{\alpha}\nu\omega$ $\alpha\pi\acute{o}$ – in SMG. Such contexts are classified into three types:

- 1) 'for a located object to fly over a reference object'
- 2) 'to build a located object ("bridge") over a reference object ("river")'
- 3) 'to wear a located object ("clothes") over a reference object ("clothes")'

In our corpus, these contexts are expressed by means of the following syntactic patterns:

$\alpha\pi\acute{\alpha}\nu\omega$ + $\epsilon\iota\varsigma$ + accusative noun

$\alpha\pi\alpha\nu\omega\theta\epsilon\acute{o}\nu$ / $\alpha\pi\alpha\nu\acute{o}\theta\epsilon\omicron\nu$ + accusative noun

$\alpha\pi\alpha\nu\omega\theta\acute{\iota}\omicron$ + accusative noun

$\epsilon\pi\acute{\alpha}\nu\omega$ + accusative pronoun

$\acute{\alpha}\nu\omega\theta\epsilon\nu$ + genitive noun

It is noteworthy that none of these includes the preposition *ἀπό*, which is necessarily used for -[SUPERIOR CONTACT] in SMG. In addition, the fact that some of them (*ἀπάνω* + εἰς + accusative, *ἀνωθεν* + genitive) can be used also to express +[SUPERIOR CONTACT] seems to suggest that the semantic criterion \pm [SUPERIOR CONTACT] was not so important as in AG or SMG. This can be supported by another observation: examples with spatial adverb + *ἀπό* found in the corpus basically indicate the motion of a located object downwards from a reference object, in which case the preposition *ἀπό* still preserves its basic meaning 'from'. Within our corpus, the cases including *ἀπό* (or its equivalent *ἐκ*) which describes the situation of -[SUPERIOR CONTACT] cannot be found before the 16th century.

The results attained by the examination above seem to enable us to infer that the semantic criterion \pm [SUPERIOR CONTACT] is not necessarily a relevant feature during the medieval period, although it contributed to the linguistic categorization both in Ancient and Modern Greek .

From the viewpoint of general linguistics, this small study illustrates that the linguistic categorization in two historical periods of a language, however stable it seems, does not always have positive implication on a linguistic categorization in an intermediate period between them.